

— 告 白 —

KIT
キャンパス
レポート ⑧
文・杉村裕之



亀井 慎子（かめい ちかこ）
金沢工業大学大学院工学研究科
環境土木工学専攻
博士前期課程二年
石川県 星稜高等学校出身

ポジティブな大人へ大変身 K-I-Tと恩師に感謝の六年

禅語に「ちやんどうじ啐啄同時」がある。雛が卵の殻を中からつく音に、親鳥もすかさず外からつついて割るとの意味だ。転じて、悟りが身近な弟子に最後、師がひと押しして導くことを指す。亀井さんの場合、クラスの修学アドバイザーで出会った花岡大伸准教授が、この親鳥の役を担ったのだと思う。

本人の弁だと、高校まで勉強は好きでなかった。やみくもに暗記するのが苦痛で、ひとつの正解を求める数学だけは興味を持てた。両親には「やりたいことがなければ、無理に大学に行かなくてもいいよ」と言われたそうだ。なので、進学は目的が曖昧なままであり、学生組織団体の学友会で奉仕活動を企画、運営する「学生地域活動推進委員会」に所属した

のも、就職活動の際のアピールになればかなりの気持ちだった。運の悪いことに、入学早々、新型コロナウイルスの感染爆発による緊急事態宣言が出された。授業はオンラインとなり、学友会活動も休止状態が続いた。「自宅で鬱々と過ごすし、かなく、モチベーションは最低でした」。

二年次に入り、少し登校できる日常に戻ってきた。修学アドバイザーとなった環境土木工学科の花岡准教授の授業が面白く、アドバイスにも励まされた。三年次、学生地域活動推進委員会の副委員長となり、地元の保育、介護施設へ清掃と交流に訪れる行事を復活させた。「二百人が参加して盛り上がり、今も忘れられない思い出です」。

「迫力と臨場感は想像を超え刺激的でした。先生は、ちょっと難しいことへの挑戦を私たちに促し、その積み重ねで新しい世界が見えたと感じます」

大学院へ進学することを三年次、自らの意思で決めた。「亀井さんは誰にも臆することなく話しかけ、学会でも積極的に人的ネットワークを広げています。明るく誠実な人柄と強い責任感で、研究室を牽引する頼りになる存在です」（花岡准教授）。

同時に、「いろんなチャンスを与えてくれそう」と、花岡研究室を選んだ。配属直後、トンネルの躯体に使う新素材の耐久性と強度の実験で、北海道の工事現場に同行した。

金沢工業大学

石川県野々市市扇が丘七一
電話番号（〇七六）二四八二〇〇